

近代在来産業の展開と地域特性

——塩業と織物業を中心にして——

相 良 英 輔

はじめに

ただいまご紹介頂きました相良でございます。私は、島根大学に所属しておりますけれども、大学院時代に熊毛郡の平生町で町史の編さんに従事しておりました。そしてだいたい七年半ぐらいを平生で過ごしました。そこで平生町がかつて塩田地帯であったことから、塩田の研究をすることになりました、それを契機にして塩業史研究がライフワークになってきたわけでございます。さらに平生町史の編さんに従事したことから山口県史の仕事に誘われまして、今日ここでお話をさせて頂くことになったというでございます。

現在私は、山口県史のほうでは近代部会に所属しております。近代部会は二冊目の『近代4』を今編集中でござ

いまして、それは「産業経済編」になっており、ちょうど在来産業も今編集中の本の中に扱っており、本日のようなテーマでお話をするということになったわけでございます。『近代4』は今年度中には発刊できるように努力しております。

さて、はじめに本日のお話のテーマになっております「在来産業」について述べておきます。在来産業というのは江戸時代以来の伝統的な在来産業の内、農業以外の分野の動力機械導入以前の産業ということでございます。明治期に産業革命を担った紡績業のような近代産業に対比されている産業ということができると思いますが、動力機械を用いる以前の本綿織物業とか、製糸業、製紙業、醸造業、陶磁器業とか塩業などを指しております。

在来産業は明治以降の近代工業社会に取り残された産

業というイメージがあります。すなわち技術革新の結果、機械化し、工業化して近代産業に発展していったものではなくて、近代工業の工業化の流れの中で、むしろ挫折し取り残された産業と見なされてきたのではないかと思っています。それは取りも直さず近代産業が近世以来の在来産業の単純な延長ではなくて、明治以降の世界市場とのつながりの中で近代的な金融業、銀行などに支えられて初めて成立したというような考え方に立っているのではないかと思っています。

しかし今日では、明治中期以降の在来産業を積極的に評価し、第一次大戦期に至る時期までを、いわゆる近代産業、紡績業のような近代産業と在来産業の均衡的な成長期とみる考え方も多くなりました。私も塩業を研究してきたということもありますが、近代以降の在来産業を積極的に取り上げてその展開過程を明らかにすることは、近代日本の経済構造の特質を知る上で、重要なことと思っております。

さて、明治期以降における山口県の経済発展を見ますと、在来的な産業部門の果たした役割は、結構大きいのではないかと思っております。明治十七年の史料を掲載していると思われる「興業意見」という史料があります。それを見ますと、山口県の県内総物産価格が七〇五万円

でありますが、そのうち主なものを比率で見ますと、米が約五二％、麦が九％ですが、あと木綿織物業が八％、食塩が五％と、ほかに菜種とか実綿とかいうものが続いているわけでございます。

山口県では米と塩と紙を防長三百と称して、江戸時代からの特産にしておりました。これに蠟と白木綿を加えて、「防長の五百」と称した場合もあります。本日は山口県の代表的産業であります塩業と織物業を取り上げて、歴史的な展開をたどって、近代における山口県の経済産業構造の一端を見ることにしたいと思います。

一 塩業（休浜法と秋良貞臣）

（一）瀬戸内十州塩と山口県

まず、はじめに塩業でございますが、本日は塩業の中で特に、冬場の製塩を休む休浜法とそれに大きく関わった秋良貞臣という人物を中心にお話してみたいと思います。その前に瀬戸内十州塩と山口県を簡単に振り返ってみます。

瀬戸内十州とは、播磨、備前、備中、備後、安芸、周防、長門、阿波、讃岐、伊予の十か国のことであります。今日の県名で申しあげますと、東の方から、兵庫、岡山、広島、山口、四国の方に徳島、香川、愛媛の七県になる

わけです。要するに瀬戸内十州というのは瀬戸内海を囲んだ製塩県という事でございます。

江戸時代の中期以降、この十州が塩の特産地として全国の大半を占めていくわけでありました。江戸時代の初期におきましては、全国至る所の海岸地帯で塩の生産が行われていました。そこで塩の生産形態は江戸時代の初期でございますから、中世的ないわゆる揚げ浜によるものです。揚げ塩田というのは、満潮時に冠水しない陸地に塩田を築いて、海水をそこに運んできて散布し、そして濃い海水を作るといふもので、二畝歩ぐらいの小さな小規模塩田であります。揚げ塩田は、要するに海の満潮時よりも少し高いところに塩田を作って、海から海水を担いで、そしてそれを撒いて塩を作るといふものですから、海水を運ぶのに非常に労力がいふといふもので、規模も小さいということになります。今日では石川県の能登に観光塩田としてそのまま残ったものがあります。山口県では明治の末ぐらいまでに柳井の阿月というところに揚げ塩田が残っております。

江戸時代前半の大坂、京都、江戸の三都をはじめとして、城下町の発展が大量の塩需要を生み出してきます。そして都市への塩の運送に便利で大量生産を可能にする地帯として、瀬戸内十州が塩の特産地に成長してまいり

ます。それに伴ない全国に散らばっていた小規模塩田が駆逐されていくわけですが、量産を可能にしたのは、入浜式塩田の発達であります。

入浜式塩田は、塩田の海側に堤防を築いて樋門をつくり、潮の干満の差を利用して海水を引き入れるという塩田であります。満潮時に樋門を通して海水が入る。干潮になったら樋門を閉める。そして入ってきた塩水から塩を作っていくという形でございます。その入浜式塩田は、海水を揚げのように担いで運ばなくて、自然の力で海水を入れ込むわけですから、ずいぶんとそこで労力が省かれることになります。はじめは入浜式塩田も四、五畝歩の非常に小規模なものでありましたが、江戸時代の中頃には一町歩から一町五反歩の規模に拡大していくわけでございます。それがずっと昭和三十年代まで延々と続きます。

瀬戸内十州地域での入浜式塩田の展開とあいまって、今度は消費の方でございますが、西廻り海運の整備は、瀬戸内で生産された塩の全国市場への展開に一層の拍車をかけます。だいたいそれまでは市場が非常に狭いのです。山口で作られたものは山口で消費するというようなものであったものが、西廻り海運が開発されて、下関から山陰、北陸、酒田へ運ばれるようになります。西廻り航路

は酒田から佐渡、能登、下関を経て大坂に至り、さらに紀伊半島を廻り、江戸に至る航路です。河村瑞賢という人が、一六七一年幕府の命令を受けて西廻り航路を確立します。そして翌年に江戸に米を送ることに成功して、それから西廻り海運の隆盛をもたらします。これが瀬戸内海船の日本海への進出を生んだのであります。そして生産力の高い入浜塩田による塩は、生産力の低い日本海側の入浜塩田や揚浜塩田を駆逐していくことになるわけです。関東、東海、山陰、北陸の揚浜塩田は、しだいに衰退して、消滅していくという歴史をたどることになります。特に山陰から越前にかけては塩田が駆逐され、防長で作られた塩が運ばれていくようになります。

江戸時代後期以降、瀬戸内十州地域は全国の塩の生産量において圧倒的地位を占めていきました。近代になって塩専売制の成立した明治三十八年時点で瀬戸内七県の擁する塩田面積は全国塩田の六割以上ありましたが、さらにその後、その比率を高めて昭和の十年頃になりますと九〇％は瀬戸内塩ということになります。生産量の比率においては面積よりもさらに高くなります。明治三十八年瀬戸内七県の生産量は全国の八〇％であります。

元々は、塩はいたる所で作られていたのですけれども、長い年月をかけて、ほとんどが瀬戸内で作られるという

形になるわけです。瀬戸内七県を県別に見ますと、明治三十八年の七県合計塩田面積が五〇〇〇町歩、全国で七〇〇〇町歩あります。七県のうちもつとも面積の大きい県は山口県で一〇〇〇町歩ちよつとあります。次いで香川県の約一〇〇〇町歩、兵庫県の九〇〇町歩というふうになるわけです。このとき山口県でもつとも大きい塩田は中関村、今の防府市ですけれども、三田尻塩田ということになります。町村別で見ても中関村の三田尻塩田が全国一広い塩田ということになるわけであります。三田尻塩田に次いで大きいのは徳島の撫養町の撫養塩田、それから赤穂浪士で有名な赤穂町が三番目に大きいということになります。

(2) 近世塩業における休浜法の成立

次に江戸時代の塩業における休浜法の成立を簡単に紹介しておきたいと思います。

瀬戸内十州地域の塩は全国供給高において圧倒的比重を占めておりましたが、十州同盟は江戸時代の一七〇〇年代以降、各地塩田の開発、塩の生産過剰、塩価の下落という塩業経営の危機に直面した十州地域の塩業者が一致同盟して休浜法を実施し、危機の打開を図ろうとしました。それまで、製塩業が非常に儲かるということで、どんどんどんどん開発していったんですけれども、塩と

いうのは消費量が急激に拡大するというわけにはいきませんので、作り過ぎたら今度は操業短縮をしなければなりません。休浜法の本質というものは、一定期間の休業を実施して需給の調節を図り、塩田の維持と生産費の軽減を企図したものでありました。要するに効率の悪い冬の塩作りを止めて、操業短縮を図って、生産コストを下げようとしたのであります。

休浜法以外に替持法と申しまして、操業中の夏の塩田でありましても半分ずつを隔日ごとに操業する方法、あるいは三日に一回、というようなやり方もあります。防長塩田では休浜と替持法が併用で採用され、安芸国の竹原、広島竹原塩田などでも替持法の実施をすぐに願ひ出たりしておりますけれども、簡単には許可されませんでした。したが、しばらくして竹原でも実施されました。さらに幕末には三日に一回というやり方も採用されるようになっていきます。要するに、毎日よりも二日に一回、三日に一回製塩する方が、塩付きがいいということのようでございます。

江戸時代の休浜法は一般に二九法とか三八法に大別されますけれども、二月から九月までとか、三月から八月までとかというような製塩の仕方でございます。二九法の提唱者は安芸国豊田郡瀬戸田の浜人であった、三原屋

貞右衛門でございます。しかし、この時は安芸、備後、伊予の三か国の代表塩田によって休浜同盟が結ばれるわけです。十月から一月に及ぶ四か月間は休業をするということです。しかし、この休浜法は広島尾道や竹原の塩田のみで実施され、ほかはあまり守られず、結果的に塩価の下落を招いただけで休浜自体の崩壊を招いてしまったということになっております。

最初の休浜が失敗した後、今度は三田尻の鶴浜の浜人であった田中藤六（豊後屋）によって、いわゆる明和休浜が提唱されます。その後江戸時代の休浜同盟は充実していきますけれども、今度は明治時代になって廃藩置県となり、休浜に対する規制力がなくなつて休浜同盟は崩壊してしまうことになるわけです。そして政権の混乱の中で崩壊した休浜同盟を立て直すのが、秋良貞臣ということになるわけです。

(3) 三田尻塩田と秋良貞臣

山口県の製塩業者は藩政時代から引き続き、毎年、春秋の二回室積集会、室積に集まつてその年の休浜の期日を決めていました。山口県塩田の中核的な存在であった三田尻の塩田では、明治八年にそれまで村々に持つていた会所を統合して、一五〇塩戸三〇〇町歩を擁する大会所（地主の団体組織）を設立します。製塩業の組織のイ

メージとしては、大会所のもとに地主がおり、さらに地主のもとに小作人（経営者）がいて、小作人（経営者）が浜子を雇うという形になるわけです。三田尻の場合はその大会所が、直接経営者や浜子をかなり規制する力を持っていました。

明治九年の三田尻大会所の「子之春定請狀之事」を見ますと、大会所は各浜の地主に対し、小作人や塩業労働者との契約に様々の規制を加えていることが分かります。小作人との契約に際しましては地主、小作人双方とも会所へ届けさせることにしておりますし、また浜子、釜焚、寄せ、跡突などの塩業労働者を雇用するときは前の雇用主の許可状、保証人のある者のみを雇うように申し渡しております。

そして、そこには次のようなことが書いてあります。「最近是不心得者がいて保証人のないまま雇っている者がおり、許されないことである」とか、「今後前の地主の許可状、保証人をちゃんと調べて雇うようにすること」。また、浜子とか釜焚とか寄せなどの塩業労働者の賃金については、米価その他の物価を参考にしながら、大会所が賃金を決めているが、時々不心得な浜経営者がいて塩業労働者を確保するために内緒で規定外の賃金を払っている者がいるとして、大会所の申し渡しをちゃんと守る

ように、と書いています。

明治十四年の「塩田大会所規則」によりますと、塩田を売るときは買い受け人から塩田の本社ならびに大会所規則に違反しないという契約書をとって、大会所に提出することになっております。また小作人の大会所を通した経営収支において、差し引き不足、赤字を出した場合、その赤字は地主が保証して大会所に払うことになっていきます。

大正二年の専売局によって刊行された『塩業組織調査書』の「三田尻塩田大会所」の項によりますと、その執行機関は次のようになっております。すなわち大会所の議決機関は地主総会、地主総代会、重役会であります。頭取と理事七人を重役と称し、重役は地主総代会において選挙で選ばれます。そして執行機関の活動は、ほとんど地主総代会の議決に拘束されております。このように見てきますと、大会所は塩田の経営について大きな発言権を持っており、さらに各塩田に対してかなり細かいところまで規制を加えております。もつとも塩田は堤防とか入川とか共同利用している施設が非常に多いわけで、さらに石炭の購入や塩の販売なども大会所を通して行っております。したがって塩浜共同体のもつて大会所で決められることは、必然的に多くなりました。三田尻塩田

大会所の構成員は地主であり、彼ら地主はお互いに協約を結ぶことによって経営について同一行動をとり、小作人や浜子の支配も大会所の下で行っておりました。

山口県において大会所の規制力が強いのは、近世以来会所主導で休浜を実施してきた伝統があることによります。前にも述べました三田尻浜・鶴浜の田中藤六は一七七一年の休浜法Ⅱ生産制限を推進し、生産過剰気味であった製塩産額を減少せしめ、価格を維持し、一方で生産費の減額を図ってきました。しかし、これは防長という藩域を越えて生産条件や市場関係を異にする十州製塩業者が休浜同盟を結んでこそ成果の得るものであり、それを推進したのが三田尻浜でありました。そして大会所の規制力は藩の積極的な後押しもありまして強力になっていきました。このような経緯もあって、明治以降も浜会所主導の塩田経営が行われてきました。明治前期においてこのような浜会所を、主導的に担っていたのが、秋良貞臣でありました。

秋良貞臣は一八四二年長州藩士であった熊本郡阿月（現柳井市）出身の浦輓負の家臣の長男として生まれました。陪臣の子でありましたが、明治維新に活躍して、明治五年には県の租税課物産掛に所属し、八年には山口県九等属になっております。九年には前原一誠の萩の乱の

平定に功をあげました。これより先、防長では明治元年休浜について、三田尻六か所は四月十三日に持始め、九月十六日持止め、小さい浜は四月三日に持始め、九月二十六日持止め、百姓小浜は、三月十八日持始め、十月二日持止めと定めました。要するに小さい浜ほど早く始めて秋の遅くまで塩を作ることを許す。大きい浜は、なるだけ短い期間操業する。そういうふうな形の休浜法、同盟を結んでいました。

しかし、四年の廃藩置県以降は藩権力の影響力がなくなつたということもありますが、そういう規定が乱れていきました。明治十二年の一月、山口県は県下各浜の頭取を山口に招集して、塩田会話を開催して、塩田の経営に關して一二箇条の諮問をしました。同年三月には防長塩田者代議員五〇余人が、山口の龍福寺に会合して塩田規制および塩田申合規制を定めて、ここに明治期の防長塩業者の休浜同盟が、改めて結ばれる形になるわけです。この時の塩田規則は秋良貞臣の起草したものでありました。

秋良貞臣は明治十二年五月に県庁を辞めて塩業界に身を投じます。同年九月には防長塩田会が開催されて防長塩田会社が設立されますが、秋良貞臣はその社長になっております。十五年には防長塩田会社規則、申合規則が

定められ、秋良はそれによって再度社長に再選されております。明治十七年の五月には十州塩田同業会が農商務省の認可を受けて、貞臣はその会頭になりました。明治十八年にはこの組織は農商務省の特達によって、十州塩田組合と改称されました。そして二十年には秋良貞臣に替わって日本最大の塩田地主である岡山の野崎武吉郎が本部長になります。野崎家は、塩田二〇〇町歩、田地六〇〇町歩を所有する地主であります。

秋良貞臣は明治十五年から十七年の間に三田尻大浜の五の桝というところに一塩戸の塩田を買って、一応地主にはなり、塩田同業者になつておりますが、これは彼が塩田経営に意欲を持つて買ったと考えるよりも、塩田同業会の代表者になるために買ったと見なす方が自然だと思ひます。秋良貞臣は山口県庁の行政官として、勸業係に身をおいたことを契機に、塩業界を指導する仕事に携わり、その行政手腕、政治力によって頭角を現し、十七年、四五歳で十州塩田同業会の会頭になるのであります。もちろん、貞臣の才能がそうさせたのであり、貞臣の才能を認めた塩田地主たちが、貞臣を自分たちの指導者にしたのであります。しかし、一般的には、塩田経営者もしくは塩田地主の中から塩田同業会や十州塩田組合の指導者が出てくるというのが自然でしょうけれども、秋良

貞臣のようにそれまで塩田を持つていなくて、県庁の役人であつて、たまたま塩業の仕事を県庁でやつたということ契機にして、塩業界のトップになるというのは、非常に特異だと思ひます。

二十年四月秋良の後を継いで日本最大の塩田地主である岡山の野崎武吉郎が、十州塩田組合の本部長になります。日本の代表的な塩田である三田尻塩田の地主たちの中から、日本塩業の指導者が出なかつたのは、ちよつと寂しい氣がしないでもありません。

(4) 三田尻塩田地主

明治十五年の三田尻の塩田地主の名前と所有塩田がわかる史料として、「防長塩田台帳」というものがあります。三田尻四浜の合計は一五二塩戸、二三五町四反です。一塩戸だいたい平均一町五反歩ぐらいです。四浜の四つの浜の内訳は、古浜四一塩戸、中浜一三塩戸、鶴浜二三塩戸、大浜七五塩戸というふうになります。

古浜は、藩主の毛利吉広によつて築かれた三田尻大開作の一部です。中浜は厚狭毛利就久によつて築きたてられたもので、さらに修復された一三〇町歩の一部であります。大部分は田畑で、中野開作というふうと呼ばれてあります。その南側の塩田が中浜です。鶴浜は堅田元武拝領の勤功開作によつて築留められました。しばしば決

壊して、完成しないままに藩に返されて、藩が撫育方によつて完成します。

三田尻塩田は比較的生産力も高く、塩田の地価が田よりも高くなっています。したがって、小作料も塩田の方が田の一・七倍ぐらいになっています。ただ、塩業は多くの人を雇用して、石炭の購入価格とか、塩の販売価格によつて、利潤が大きく左右され、さらに、自然条件によつて、生産高が大きく異なつてくるため、経営がやや不安定なところがあり、投機的な性格もあります。一塩戸だけ塩田を持つていゝような地主は、そういうダメージを受けた時に、なかなか立ち上がれないということがあります。したがって、長期にわたつて安定的な経営を続けている者は、それほど多くはありません。

「防長塩田台帳」に載っている塩田地主の内でも、その後、次第に規模を大きくしていくのは時政寅之助の家だけでございます。時政家は江戸時代には大庄屋を務めた家ですが、明治時代でも、大地主になつており、大正六年には一塩戸の塩田地主であります。『塩業組織調査書』によりますと、時政梅吉は明治末年、三田尻塩田大会所の理事も務めております。しかし、彼が塩業において積極的の発言したというようなことはなかなか史料には出てきません。

貞永恭一家は幕末に廻船問屋を営み、明治十七年に塩田を七塩戸所有し、二十四年には先代が華浦銀行を設立しております。貞永恭一は、明治四十二年頭取を退いて、四十五年には塩田もすべて売却しております。

熊毛郡の小松原出身の郡外地主であつた坂本貞三は、十七年には八塩戸の塩田地主になります。同三十年から昭和十九年まで、六塩戸を所有し続けております。坂本家も大地主でございます。大正十三年の田地の所有高が約五七町歩で、大規模耕地地主として安定した小作料収入を得ていて、その経済力によつて三田尻の塩田を購入し、小作に出していたものと思われまゝ。しかし、坂本家は郡外地主であり、三田尻の塩田地主として、指導的立場にあつたわけではありません。坂本家にとつては、塩田は単なる投資資産でしかありませんでした。

明治十五年の三田尻塩田一五二塩戸のうち、八六塩戸の地主は、一軒だけ持つていゝという地主であります。三田尻塩田の地主たちは、彼らの組織である大会所に結集して、「地主総代会」なる組織をつくり、ここで経営上の主なことを決めております。その指導者として、地元出身者ではありませんが、県庁出身で、広範に知識を持つていゝ秋良貞臣が登場してきて、三田尻塩田をまとめあげていったのであります。

三田尻塩田の指導者といえば、山根健索を挙げねばなりません。明治十一年、山口県は県下の塩業者に対して田中藤六の故事を引いて塩業者が一致協力していくように告諭しました。要するに休浜同盟を協力して実施するように要請しているのであります。そして各浜に対して塩田地主の中から頭取を選んで県庁に届け出るように令達しました。この時の三田尻の地主たちは山根健索を塩田総頭取に選出しております。山根健索は防長浜の有志者と図つて塩田維持の方法を確立するため、県庁に塩田同業者会話を開催することを請願し、十二年、県は県下の各浜の頭取を山口県に招集して塩田会話を開催する事になるのであります。明治十九年、山根健索は十州塩田組合の防長支部長であります。

このほか西浦浜の藤田貞三も秋良や山根らと早くから活躍します。秋良貞臣の亡くなった後、明治四十年には藤田貞三が防長塩田組合の組合長になっていきます。このほか秋良貞臣が登場してくる以前の明治十年以前、塩業保護を政府に積極的に求めるような訴えをしたりして塩田会話でも活躍する人に、佐波郡宮市村出身の末松軍平という人がおります。このように明治時代の山口県塩業界では秋良貞臣、山根健索、藤田貞三それに末松軍平というような人たちが活躍しています。その中で秋良貞臣

が特別に突出した活躍することになるわけです。秋良貞臣につきましては防府市の厳島神社におおきな石碑が建っておりますけれども、あんまり知られていないといえますか、研究もなされていないということもありまして、これを機会に秋良貞臣の指導力とか行動力とかいうものについて、少し話さして頂きたいと思っています。

(5) 秋良貞臣の指導力・行動力

秋良貞臣は明治五年から明治三十八年まで日誌を書いており、六五歳で死んでおります。また、貞臣は塩業に関する様々な資料を収集し、特に自らが十州同盟会の再興に尽くした足跡を資料として残しております。『煮海私記』と題して一四冊の本を書いております。この『煮海私記』は昭和三十九年に塩業組合中央会によって、当時山口県立山口博物館の館長をされていた白杵華臣先生の監修のもとで一〇一五ページの大著として出版されました。『秋良貞臣日誌』は九冊ありまして、昭和五十六年から防府市の教育委員会によって、これも毛利博物館の館長を当時なさっていた白杵華臣先生の監修のもと、刊行されはじめ、平成元年に完成しております。すなわち「防長史料」第二〇集から第三八集がそれであり、監修者の白杵華臣先生は先般亡くなられましたが、先生の生前、防府市教育委員会がこのような史料を公刊され

たということに敬意を表したいと思います。

この日誌を読みますと、秋良貞臣がいかに激しく生きたかがよく分かります。その行動力には驚嘆します。交通機関が乏しい時、十州塩田をしばしば巡回したり、大阪に行ったり、東京に行ったりということをやっているわけです。十州七県の塩田をしばしば巡回して塩田地主と常に接触しながら、塩業のことを勉強しています。彼の実家は柳井市の阿月ですけれども、時々帰郷のことなども書いております。帰郷に際しては、平生の塩田地主などともよく会っています。県庁を辞職して塩業界に身を投ずる前年の明治十一年、阿月へ帰っておりますが、その時の様子を簡単に紹介しますと次のような行動になっております。

まず山口から三田尻に出て、三田尻から汽船に乗って室津に着いて、そこで一泊して小さな舟で阿月に行くわけです。山口からだいたい柳井の阿月まで一日がかりで帰っています。

帰りは柳井からちよつと川を遡って、田布路木から平生の宇佐木という所へ行つて、宇佐木から人力車で平生まで行きます。平生では必ず貞臣は井上家に泊まるんですが、たぶん井上岩太郎だろうと思うんですが、明治三十八年に平生の塩田地主の弘津享太郎などと平生塩炭株

式会社を設立する人です。秋良貞臣は井上兄と日誌に書いていますから、しばしば出てくるんですが、親戚筋だと思っています。平生では塩田地主の弘津享太郎としょっちゅう会います。弘津享太郎は明治二十三年には田地が三〇町歩、塩田が二一町歩ぐらいある平生第一の有力資産家ですけれども、明治二十年には秋良貞臣とロシア、朝鮮へ塩のことで視察に出かけています。貞臣はこの時も井上岩太郎や弘津享太郎と会い、一緒に平生の在郷町の野島で演劇を見物したりしています。それから弘津享太郎の家で、ほかの平生の塩田地主や中嶋富蔵（江戸時代の庄屋の家）とか大きな地主である小野本固蔵とかいうような人たちと会っています。そして帰るときは小舟で平生から室津まで行つて、室津で汽船に乗りかえ、三田尻に帰っています。この時一二日間費やしています。

十五年になりますと、農商務省に地質調査所というのが設置され、ここで日本の塩業の行政指導を行うことになりました。所長は和田維四郎、分析係長はお雇い外国人でドイツ人のオスカー・コルシエルトです。和田とコルシエルトは春から夏にかけて十州塩田など全国の主要塩田を調査しています。同年五月和田維四郎は三田尻浜に出張してきて西洋製塩法による天日製塩と思われる蒸発塩場の試験を実施することになり、貞臣はこの委嘱を

受け、古浜の古屋浜をこれにあて、築造に着手しています。六月、三田尻大会所では外国人の引き受けの準備をしておりますが、秋良貞臣がオスカー・コルシエルトに会っております。コルシエルトは貞臣の援助を受けて、三田尻浜の海水など製塩に関する詳細な調査や試験を行っております。七月には西洋製塩試験場が完成しました。八月貞臣は、和田維四郎が再び三田尻にやって来た時、その帰郷に際して広島県尾道まで同道し、富浜の紛争を解決しています。また、さらに二人で現在の広島県福山市にある藤江村というところに設置された洋式蒸発塩池を視察しています。

明治十五年の十一月に貞臣は香川県の丸亀で開催された十州塩田会に出席し、十州塩田の総代人に選任されております。そして貞臣は十州塩田会の委託を受けて兵庫県形の形浜（現姫路市）、さらに赤穂浜に行き、休浜同盟に関する紛争にあたっております。この時も四三日間の旅です。一か月半の長旅です。

その行程を簡単に紹介しましょう。山口を出て三田尻を小舟で出港、櫛ヶ浜に着き、人力車で下松会所に行き、塩業のことをいろいろ調べて、それから高森に行き、人力車を雇って岩国に行き、そこでいろいろな人に会って、今度は船で広島廿日市まで行き、さらに人力車で広島

に出ます。そして広島の子品から船に乗って尾道、香川の多度津を経て大阪に着いております。そして汽車で神戸に出て、それから兵庫県的形まで六日間の旅です。それから上灘目、形的、赤穂の坂越、尾崎、加里屋などを訪ね、赤穂東西浜の休浜の紛争を調停し、塩田同盟に成功しております。それから播州を去って、神戸に来ていた品川弥二郎に会いに行きます。

品川弥二郎はみなさんご存じのように、山口県出身で、明治十四年に農商務大輔になり、大日本農会などの設立に尽力します。二十四年には松方正義内閣の内務大臣となりますが、第二回の総選挙で選挙干渉の批判を受けて辞する人です。当時塩業は農商務省の管轄下になりますから、農商務省の中の地質研究所の所長が和田維四郎ということになりましたが、品川弥二郎はその遙か上の地位の人でございます。そして貞臣は十州塩田会のことや播州各浜を遊説した結果を報告しております。

いろいろ大役を果たして帰路に就きますけれども、大阪を出発して神戸、多度津、上関の室津に至り、室津から四時間かけて三田尻に帰っております。実に四三日間の長旅です。いろいろな難しい仕事を解決しながら一か月半の旅程です。通常ではこういうことはなかなか出来ません。非凡なエネルギーを感じないわけにはいきません。

感じましたので、ここに紹介させて頂きました。

二 山口県の織物業

(一) 幕末の長州綿織物業

次に、山口県の織物業についてお話ししてみたいと思います。幕末長州藩の綿織物については、明治維新期の社会構造を解明するための重要な産業としてこれまで数々の研究がなされてきました。本日はそれらの研究成果に言及は出来ませんが、長州藩が江戸時代後期から綿織物業の盛んな地域であったことは、はっきりしております。山口県の文書館蔵「阿部家文書」によりますと、一八世紀中頃には長州藩の大坂への木綿の移出高は、一五〇万反近くありました。その後は減少して七三万反ぐらいになったとあります。七三万反の内訳は、吉敷郡と美祢郡で二五万反、大島郡で二二万反、熊毛郡が二二万反、佐波郡が一二万反で厚狭郡一二万反となっております。

ただし、ここでは綿織物生産地帯の玖珂郡は岩国藩ですの、入っております。江戸時代から大島郡、玖珂郡がもともと綿織物業の盛んな所であったということは、確かであります。そして吉敷郡や佐波郡、厚狭郡が、それに次ぐ綿織物生産地でありました。しかし、こちらは、幕末から明治初期に衰退していきます。

山口の樫野川の河口一帯は江戸時代からの開作地が広がっております。ここ名田島も江戸時代中期に埋め立てられた開作地ですけれども、このような開作地では綿作が盛んでありました。私の住んでいる所の近くに米子市の弓浜半島がありますが、江戸時代から明治中頃まで綿作で非常に有名な所です。そこでは綿作の肥料に海の藻葉を使っています。藻葉を肥料に使うということは、綿が塩に強いということをよく示していると思います。

吉敷郡一帯は埋立地を中心に綿作が広がり、それを背景に江戸時代から農村工業として織物業が展開したのであります。一八世紀初めの頃、ちょうど長府藩主の長男から長州藩の第五代藩主になった吉元の時代ですが、白木綿が盛んに織り出されて、その原料である繰綿の多くは大坂から買い入れておりました。藩内で生産される綿ではとても足りなかったのであります。そして防長の白木綿は紙や蠟とならんで、大坂市場で重要な特産物になっていました。しかし、そのうち規格の不揃いや市場の変化に対応する技術改良が無かったことから、幕末には産地間競争に破れ、大坂市場から吉敷郡一帯の綿織物は姿を消していったのであります。一方、玖珂郡や熊毛郡、大島郡の綿織物生産地は販路を中国地方や九州地方に求め、織物生産地として生き残ることになります。

(2) 近代の周防織物

さて、本日のテーマの一つは、近代における山口県の綿織物業の展開であります。近代以降の山口県の綿織物業については、周防織物同業組合の技師を務めていた三浦敏次郎の著作になる『周防織物沿革誌』が大正三年に書かれております。長い間稿本のままでありましたが、平成九年（十二年）に柳井図書館叢書の一三集（一六集として刊行されています。その他、もう四一年前になりますが、下関市立大学におられた関順也先生が『日本産業史体系』に「柳井木綿」を書かれました。七ページの短い論文ですが、江戸時代から明治時代までをコンパクトにまとめた優れた論文となっております。最近では広島大学の三宅紹宣先生が、『近世近代の社会と民衆』という本に「明治期山口県における織物の生産形態」を発表しております。三宅先生は、近世についても渡辺則文編『産業の発達と地域社会』に「幕末期長州藩における綿織物の生産形態」と題する論文も書かれ、防府市大道の「内田家文書」と「防長風土注進案」を使って詳細な分析を行っております。近代以降の研究では関先生や三宅先生も主に『周防織物沿革誌』を使って分析されているのですが、今山口県史を編さんしておりますので、その過程で近代の織物業については、多少それ以外にもいろ

いろ分かったことがありますので、少し今日紹介させていただきます。と思っています。

明治九年の「山口県各郡物産解説」という史料が山口県文書館にあります。白木綿とか縮木綿とか縞木綿それぞれについて物産の解説をしたものが載っております。この史料に登場する織機は高機、地機両方あります。地機というのは、箱機とか下機とかいうような言い方もします。ここでは明治九年の白木綿を高機で織っていたと思われる一例を紹介しましょう。

大島郡の東屋代村（現大島町）池田勝蔵の妻、松は繰綿を買ってそれを紡いで織っていますが、一反織るのに、紡績に三日半、元調べに半日、織るのに一日、総日数五日間かかっています。彼女は年間四〇反織っています。その代価は一〇円です。一反当たり二五銭になります。この時大島郡では同業者が一万四〇〇〇人、年間生産高二八万反、代価七万五〇〇〇円とあります。

もう一つ玖珂郡の例を紹介しましょう。玖珂郡多田村（現岩国市）の八城理介の妻鶴は縮織木綿縞を箱機（地機）で織っています。彼女も繰綿を買って、まず綿打ちをして、紡いで、それから藍染めして織っております。もちろん染めるのは染め屋に染めさすわけです。一反織るのにかかる日数は一三日です。年間生産高は一〇反で

その代価は三三円です。織りがかなり複雑ですから、反当たり価格が三四三〇銭と、白木綿の一三倍になるわけです。縮木綿はやがて岩国を中心に非常に急速に生産高をのばしていきます。

縞木綿についても紹介しましょう。明治九年の柳井津町（現柳井市）の中本忠蔵の妻も、繰綿を買って紡ぎ、染め屋に藍染めさせて、そして織っています。一反を紡績して織るまで一〇日間かかっております。これも地機かなと思います。年間生産高が一人で三六反で、その代価は一八円ですから、一反当たり五〇銭ということになります。三種類の一反当たり価格は白木綿が二五銭、縮織木綿が三四三〇銭、縞木綿が五〇銭となっておりま

す。

この三例から明治九年頃の大島・玖珂の木綿織物業はまだ紡績と織りの作業の分業がなされておらず、高機・地機が入り交じって生産されている、ということを窺い知ることができます。山口県における高機の導入がいつ頃始まり、広範に普及したのか明確には述べられませんが、先に紹介した『周防織物沿革誌』を見ますと、おおよそ分かります。

山口県に最初に高機を導入したのは、大島郡久賀村（現久賀町）の人で伊予機でありましたが、いつ、誰によつ

てもたらされたかは分かっておりません。その次に、熊毛郡平生村（現平生町）の国王寺周助の母が高機で木綿を織っていました。周助が木綿織物の販売を始めた明治四年頃にはその機がぼろぼろになっていたといえます。

大島郡日良居村（現橋町）の、島中伊三郎は明治の初め頃松山で結婚し、日良居村に帰る時、高機である伊予機を持ち帰り、奥さんが織っていました。その時、松井重吉も縞織を始めるために高機三台を島中伊三郎に作らせて、工女三人を雇って織らせています。このようにマニファクチャー形態で工女を雇って工場で高機で織らす者も出てきます。そのほか明治十四年玖珂郡の由宇村（現由宇町）でも筋二子縞を織るようになって織機改良の機運が高まり、岩国町（現岩国市）の菊元商店は久賀機（高機）一〇台を買い、織子に貸し与えて織らしています。いわゆる出機制の織物です。明治二十三年、第三回の内国勸業博覧会が開催されますが、これを契機に華美な染色が流行し、同時に岩国縮も高機使用の必要に迫られるようになり、縮織り用の高機が岩国機として改造されました。そして二〜三年で数千台が普及したといえます。以上は『周防織物沿革誌』の記述でございます。

山口県における木綿織物の年次別生産高をみますと、明治十一年時点で白木綿・縞木綿合わせて七五万反の生

布、今の岩国市の工場で、豊田式力織機三〇台を据え付けます。ほかに二、三の会社が導入しますが、全部失敗します。力織機を導入して成功するのは明治四十一年、当時大野村（現平生町）の周防織物合資会社です。豊田式綿織機五〇台を据え付け、五〇人の職工を雇い、四十二年には四万八七〇〇反を織っています。

機械化が進む中で、職工数は減少していきますが、力織機だけが増えたわけではありません。大正五年の『山口県治概要』を見ますと、「本県の織物は従来家内の工業にして織機も専ら手機を用ゐ来りしが、明治三十二年頃よりボタン機に移り、同四十二年頃よりは足踏織機を使用するに至り概ね出機なりしが、今や時運の進歩に伴ひ動力織機を利用する工場的工業となるもの、如し」とあります。

総合的に判断しますと、明治三十年代後半徐々に動力織機を試験的に使つて、四十年代に豊田式力織機で成功するところも現れましたが、ボタンや足踏み機も並存して使われていたということになります。

さて、山口県の綿織物生産における全国的位置についても紹介しておきましょう。明治七年で白木綿について生産高の高い順を県別に見ると、愛知県一六二万反、大阪府一五〇万反、山口が八位で四〇万反となっています。

明治二十七年では愛知が圧倒的に多く二二八〇万反ですが、二位愛媛四三三万反、山口が九位で三四万反です。白木綿以外の綿布では明治七年に埼玉一四二万反、栃木七四万反の順ですが、山口はベストテンに入っておりません。二十七年では愛知二一九万反、埼玉二一八万反の順で、山口は九位で八六万反です。綿織物の特産地としての地位を何とか守っているといつたところでしょうか。

おわりに

さて、山口県の代表的な産業であります塩業と織物業の展開を明治期を中心にみてまいりました。一七世紀初頭から昭和三十年代前半まで塩業は入浜式塩業でありましたが、さまざまな経営努力をしております。一軒前の面積が四、五畝から二町歩ほどの規模に変わり、燃料が松葉から石炭に変わります。さらに休浜が導入されて操業短縮が行われます。入浜塩田は兵庫県の赤穂から始まったと言われますが、石炭は三田尻から普及します。青江浜（現秋穂町）の江村新右衛門が一七七八年初めて石炭を使うのですが、それを三田尻で試みて普及していくのであります。休浜同盟は広島県の三原屋貞右衛門が発案しますが、それが普及したのは、三田尻の鶴浜の田中藤六が提唱した三八法です。明治になって休浜がいっぺん

崩壊しますけれども、それをねばり強く再構築したのが三田尻浜の秋良貞臣です。

今日かつての塩田の多くは工業地帯になっておりますが、我々の先輩たちは先人の格闘した地で先進的な産業を育ててきました。

織物業は江戸時代に開作地帯に広がっていった綿作を背景に農村工業として発展してきました。そして大島のように綿作はないけれども豊富な労働力を背景に玖珂郡の綿を使い、織物業の発展した所もあります。近代においては、玖珂郡を中心に周防織物業界は白木綿、縮木綿、縞木綿と市場の要求に応じた織物を生産し、染色の工夫をして市場を獲得する努力をしてきました。そして、明治時代でも全国で一〇位以内の特産地の地位を保っていました。

山口という地域は塩にしろ、木綿にしろそれほど優れた立地条件を備えていたわけではありません。塩の生産力の点からみますと、幕末にできた備前の野崎浜とか香川の塩田より、三田尻の塩田は低いのであります。木綿についても、バックグラウンドとしての綿作は備前とか大阪の河内といった優れた綿作産地のように生産力は高くはありません。国内の大市場に遠く、市場の開拓という点から申しますと、不利な立地条件にありました。し

たがって、塩は日本海側に、木綿は九州に販路を求めたわけでございます。塩も木綿も早くから朝鮮市場を開拓する努力もしております。市場のさまざまな要求に工夫をして、木綿は白木綿、縮木綿、縞木綿を特産化してきました。

私たちは先人の必死の思いで育ててきた経済的基盤の上に新しい生活を築こうとしております。在来産業の果たした役割は、単に経済的發展のみではなく、創意と工夫であったと思います。今日私たちは政治に頼って経済的豊かさばかりを追求し、創造力を衰弱させてきたように思います。そろそろ自分をいかして人生を豊かにすることを考える時期に来ているように思います。山口県が今日的な創造力によってきらりと光る地域になることを祈念いたしまして本日のお話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

(島根大学教授／山口県史編さん委員・近代部会長)